

0. 始めに

この報告では次に述べる三つの論点を取り上げ、順に説明し、最後に、時間があれば、日本事情について私が今抱いている感想を申し上げます。

第一の論点としては西周助と津田真一郎の二人の洋学伝習生がどのようにして和蘭陀語を学習したのかという点を取り上げます。次にヨハン、ヨゼフ、ホフマンという流浪の日本学者が出版した和訓を片仮名とローマ字で対照表記した『大学』を資料に、日本の文章をヨーロッパに紹介する際にホフマンが尽くした苦心の跡を窺って見ます。第三の論点は花の都パリが舞台の話です。西と津田は和蘭陀からの帰り道にパリに寄っていますが、パリにおいて五代才助と同宿した西周助と津田真一郎が、モンブラン伯爵を相手に行ったと推測される日本の政情つまり政治情勢についての新しい見方について私見を述べ、更にこうした政情の認識が幕末の政局に対して有した意義についても一言述べることになります。

1. 洋学伝習生の和蘭陀語学習法について

幕末の日本から和蘭陀に派遣された海軍伝習生の一行のうち、赤松大三郎や榎本釜次郎といった士官の連中はハーグに滞在しましたが、西周助と津田真一郎の二人は職方という武士ではなかった技術者の卵たちと共にライデンを訪れ、ライデンで洋学伝習に当たっています。資料の末尾に地図があります。Aはオランダの主要な都市の位置を示す地図です。Bはハーグの地図です。内田恒次郎を取り締まり役とする海軍伝習生と伊東玄朴と林研海の二人の医学伝習生の下宿の位置が記入されています。オランダ語を学ぶためにばらばらに下宿している様子が分かります。右下のCがライデンの地図です。津田の下宿はホフマンの住まいの向かい側にありました。Hooglandsche Kerkgrachtという通りです。この通りは昔は運河でした。聖パンクラス教会があります。「ホーフラントセ大教会」と地図にはあります。津田は大教会を「高国寺」、通りを「高国寺堀」と訳しております。地図には記入がありませんが、西の下宿は教会の裏手にあたる hooigrachtという通りにありました。下宿の持ち主は「ブレードスタート」つまり大通りに住んでいた Oudendorp という人で、西は「元治元年」の正月には、家主のオウデンドルプさんの家に招かれて、そこで新年を迎えています。西はこの人の名を「老(おい)村(むら)氏」と訳しております。西暦では1864年の2月8日の月曜日に当たりますが、津田はこの日、ハーグの沢太郎左衛門のところ「伊東、林、榎本」と共に招かれて「元旦祝儀」として「日本国より持来る堅餅」を使っ

た「雑煮」を振る舞われ、宿泊しております。津田真一郎は国学者でしたから、日本式の正月を迎えたかったのでありましょう。西の方はすっかり西洋式の生活が身に付いてしまったと見え、大みそかから西洋人の家に招かれて泊まり込んでいたわけです。

さて本題に入りますが、洋学伝習生であった西と津田はどんな風に和蘭語を学習したのでしょうか。資料の4をご覧ください。「余等」西と津田は最初の「三ヶ月」間 Van Di jk という小学校の校長先生について「毎週凡六時間」オランダ語を基礎から習い直しています。日曜日を除き、毎日一時間づつ習ったものと推測されます。初級中級段階の学習のやり方は不明です。「范題」は初級中級の段階の学校のために和蘭語の教科書を書いています。

さて上級段階の和蘭語の学習ですが、Simon Vissering というライデン大学の教授に家庭教師になって貰い、法学・政治学・経済学・統計学の分野に属する「五科」の学習を行うことがそのまま上級の和蘭語の学習法であったという仮説を本日ここに提出いたします。Vissering の専門は経済学ですが、大学教授になる前には弁護士を開業していた体験の持ち主でしたので、こうした分野の先生には打ってつけの人でした。西と津田の二人は火曜日と金曜日の晩に Vissering の自宅に赴いて、講義を聞いたわけです。講義のやり方ですが、二人のために書き下ろした簡条書きの講義ノートで Vissering が読み上げ、西と津田がそれを聞いて鉛筆で書き取るというやり方が取られた模様です。西は『万国公法』の凡例で「此書ノ原本ハ、吾カ師ナル荷蘭陀ノ國來丁府ノ大学校ニテ博士ノ職ナル畢洒林氏ノロツカラ授ケラレタルヲ、余等親(マノアタリ)ニカノ石墨モテ書キトレルモノニゾアリヌル」と記しております。「石墨」黒鉛というのは鉛筆のことでしょうから、週に二回の講義はディクティションの連続であったわけです。この時の講義筆記の一部分が津田真道の文書の中に残っています。洋風帳面にきれいに筆記が行われていて、清書したものと思われます。大久保利謙は津田の筆記が整然と書かれている点からして、口述筆記そのものではあり得ないという推測を下しています。資料の1と2をご覧ください。1864年12月3日付けで西から Vissering に宛てた手紙とその訳文ですが、「万国公法の最後の部分」を送っていることが分かります。沼田次郎さんは大久保の推測を受け、Vissering の講義ノートを「借用書写」したのちに「返却」したことを示すと、この箇所を解釈していますが、ここでは逆であったと主張したいと思います。すなわち、西と津田は講義の後に下宿に戻ってから原稿を清書し直し Vissering に目を通して貰ったのだらうと推測します。つまり講義をディクテした後で走り書きの筆記を次の講義までに清書して間違いないか先生に見て貰い、それを更に洋風帳面に纏めて書き写したのであったらうと

推測する次第です。

以上第一の論点について述べました。

## 2. 日本事情（その一）ホフマンへの協力

論点の二に入ります。ヨハンヨゼフホフマンは当時ライデン大学で日本学と中国学の教師をやっていました。ホフマンは四書五経の始めである『大学』の和訓本を1863年の9月に刊行しています。西と津田が校正に当たっています。The Grand Study という題の第二部はローマ字表記本で、英蘭対訳の解説が付いています。資料5をご覧ください。上段が漢文の傍らに和字により訓を付した『大学』の訓読本です。通常の訓点だけでなく、読み仮名が全部振ってあります。また漢字の熟語はハイホンで結ばれています。下段はローマ字表記本です。上段と同じ箇所がローマ文字で表記されています。表記法に色々な工夫が見られます。イタリック体と通常体のローマ文字が使い分けられていますし、漢語から入った字音の語はイタリック体で表記されていて、和語はローマ字体で表記されています。漢字の熟語はハイホンで結ばれています。またアクセント符号が付されています。ホフマンの住まいの向かいに下宿していた津田真一郎に native informant として本文を読んで貰い、そのアクセントを記録したとあります。ホフマンは漢文訓読体を日本語における学術文体と考え、候文や会話文への導入とすることを企てたわけです。

ご承知のように、和音を表記する仮名とは別に、漢字音を専ら表記する音韻符号である「真名」はいまだに発明されてはおりません。

## 3. 日本事情（その二）モンブラン伯爵への寄与

論点の三に進みます。パリにおいて西周助と津田真一郎が五代才助と同宿したことをまず確認します。資料3をご覧ください。五代才助、後の五代友厚が1865年にヨーロッパを旅行した際に書いた「廻国日記」から洋暦の12月4日の月曜日から12月19日の火曜日までの記事を抜き書き、旅の会計簿である「仏国諸出入書」の記録とを対照した表です。奇妙なことに五代の日記には曜日の記載はありますが、日付は余り見られません。しかも会計簿である「出入書」の支払いの日付と曜日から推定される日付に擦れが認められます。例えば12月4日に「エレキテイセ・ランプ」つまり電球の「製作所」を見学した時の馬車代の支払い日は「十月十六日」と記されていて、邦暦換算した10月17日と一日のずれが生じています。日記の記事を見ると「幕生兩名当舎へ来る」この日の晩に西と津田の二人が五代の宿泊していた「カラントホテル」に到着したことが分かります。西と津田はどうやら12月15日の金曜日までこのホテルに滞在していた模様です。しかもこの間に南フランスの貴族の出身で革命を嫌ってベルギーに移り

住んだモンブラン伯爵がしきりに五代のところを訪れています。12月8日には五代はモンブラン伯のほか西と津田とを連れてレストランに行き薩摩側の奢りでご馳走をしていることが判明します。五代やモンブランは翌年にパリで開催される予定の万国博覧会へ薩摩国からも出展する手筈を整える交渉に当たっていたのですが、西と津田がパリを「出立」した翌々日の「西暦十二月十七日」の日曜日には万博の主催者を招いて会食しています。更にその翌日の月曜日つまり12月18日には「欧羅巴中地理学の衆会」に五代も参加しています。この日モンブラン伯はヨーロッパ地理学会において日本の政情についての学術報告を行ったのですが、その懇親会に五代も顔を出したものと推定されます。この報告を転回点として、徳川將軍を日本の国王と見るそれまでの日本認識が後景に退き、徳川家は特別に巨大な大名家ではあれ、基本的には他の大名家と並ぶ諸侯の筆頭であるという新しい日本認識がヨーロッパに広まります。新しい時代認識は徳川家の観点に立つ政治体制の認識ではなく、大名家の観点に立つ徳川政治体制の認識であったわけです。やがてナポレオン三世はこうした新しい時代認識に立って徳川家一辺倒であったフランス公使のレオンロッシュへの信認を覆し、鳥羽伏見の戦いに敗れた徳川家を見捨てるに至るのです。

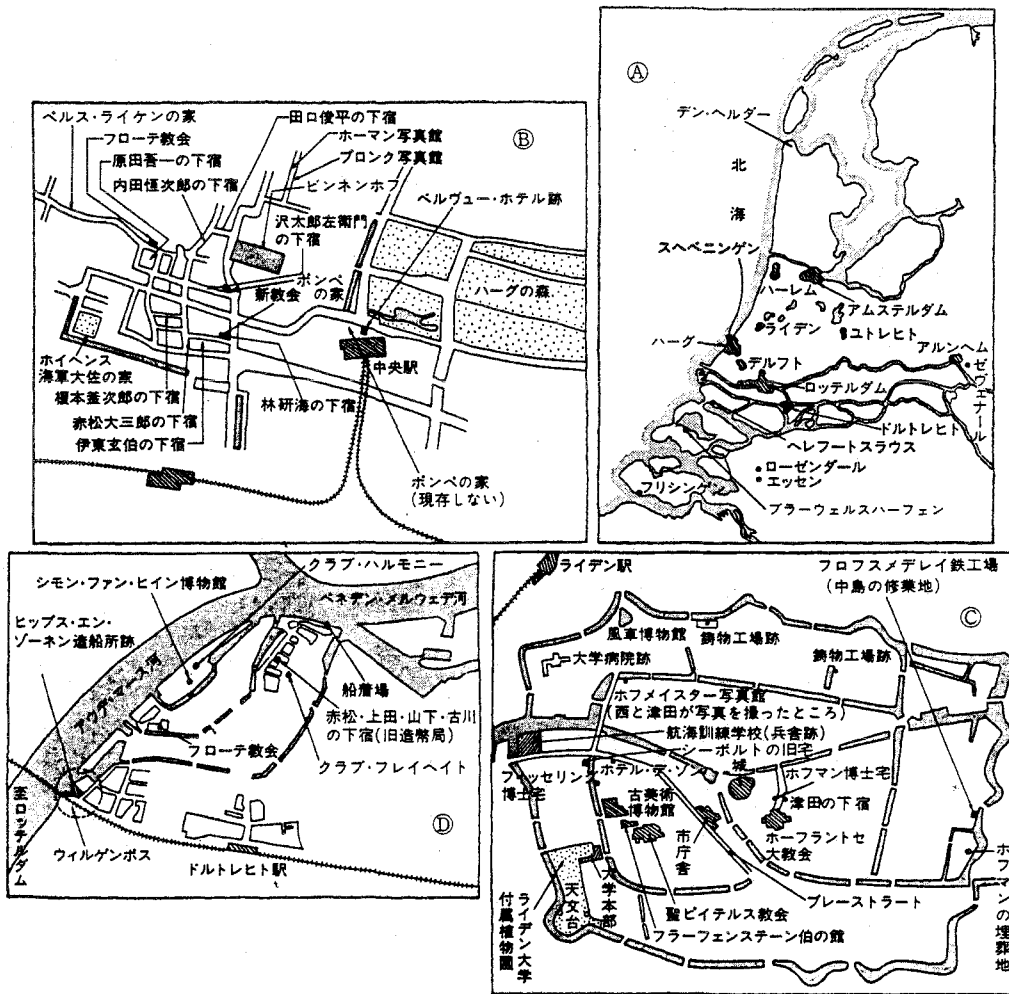
こうした新しい日本認識の出所は西と津田という二人の洋学伝習生であったに違いありません。ヨーロッパ政治史の基礎を学び、古代中国や中世日本の歴史にも通じた西と津田は、徳川家による日本統一か薩摩や長州の分離独立かという瀬戸際に日本が立っていることを良くわきまえて居たと考えられます。花の都パリでこうした密談が平然と行われて居たとは意外ですが、日本事情は国際社会の対日認識を左右する力を秘めた分野であると言えるかと思えます。

#### 4. 日本事情の現段階

最後に一言。日本認識の再転回が近付いています。万世一系というスローガンに見られるような朝廷が一貫して日本の王権であったというこれまでの日本認識は崩壊寸前です。南北朝の内乱以降の日本の国王は公方であって禁裏ではないという新しい日本認識が登場し始めて居ます。要するにこれまでは禁裏御所を朝廷と取り違えていたのです。南北朝より後には公方つまり將軍の御所や居城が朝廷であったということです。室町御所や江戸城が朝廷であった。禁裏御所は宗教家の聖地であったということです。国際社会がこうした新しい日本認識を抱くようになれば、対日政策も根本から変わり、それに伴い日本社会も一変することになるのではないのでしょうか。

《参考文献目録》

- 『幕末和蘭留学関係史料集成』大久保利謙編著、雄松堂書店、1982  
『続幕末和蘭留学関係史料集成』同 1984  
『津田真道---研究と伝記』大久保利謙編、みすず書房、1997  
宮永孝『幕末オランダ留学生の研究』日本評論社、1990  
同 「オランダにおける津田真道」(『津田真道』所収) 1997  
『西周全集』大久保利謙編、第2/3巻、宗高書房、1966  
『津田真道』津田道治、1940  
蓮沼啓介「パリのめぐり会い」神戸法学雑誌32-2、1982  
沼田次郎「ライデンにおける西周と津田真道」東洋大学大学院紀要第19集、1982  
Luke S. Roberts, The Petition Box in Eighteenth-Century Tosa. *Journal of Japan Studies*, 20:2 1994  
-----, A Petition for a Popularly Chosen Council of Government in Tosa in 1787.  
ロバーツ・ルーク「土佐藩訴状(目安)箱の制度と機能」海南史学28号、1990(8月号)  
同 「土佐藩士今喜多作兵衛による藩政改革案」土佐史談、200号、1996、12月号  
同 「土佐と維新 --- 『国家』の喪失と『地方』の誕生」(年報)近代日本研究19  
1997  
渡邊與五郎『シモン・イッセリング研究』文化書房博文社、1985



①オランダ ②ハーグ ③ライデン ④ドルトレヒトの地図  
(宮永孝作製)

大久保利謙編 続幕末和蘭留学関係史料集成 口伝

治身科(4)

毎週一、待下、筆記口授、二隔年、然日句餘、Van Dijk 語學之師曰范淵、幾每週九六時間

(下回) (西岡全株本 Ⅱ 一三九頁)

(治身科 5)

大学 知学、知学、知学、一八六三

大學生 朱熹章句

子程子曰、大學、孔氏之遺書、而初學入德之門也、於今可見古人為學次第者、獨賴此篇之存、而論孟次之、學者必由是而學焉、則庶乎其不差矣。

一節 大學之道、在明明德、在親民、在止於至善、二節 知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得、三節 物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣、四節 古之欲明明德於天下者、先治其國、欲治其國者、先齊其家、欲齊其家者、先修其身。

(治身科 5) 2)

Hofmann, J. DE GROOTE STUDIE 1864

DAI-GAKU.

SIYU (ku)-ki syōu-ku.

Si-tē si no ivākū: Dai-gakū vā Kou-si no i-syōni aitē, sīkūsitē syō-gakū tokūni irū mon nārī. Ima ni ōite ko-zin gakū sūrū nō si-tēi mīrūbēki mono vā hitōri kono hen no zonserū ni yorēri; sīkūsitē Ron, Maū korōni tsūgū. Gakū-siya kanradzū korēni yōtte manabēbā, sūnavātsi sono tagavazārū ni tsūkāsī.

- § 1. Dai-Gakū no mitsivā mēt tokū wo akirākāni sūrū ni āri; tami wo arātāni sūrūni āri; si-sen ni todomārūni āri.
§ 2. Todomārūkoto wo sītte, sīkūsitē notsi sadamārūkoto āri. Sadamātte, sīkūsitē notsi yōkū sidsūkā nārī. Sidsūkā ni sītē, sīkūsitē notsi yōkū yāsūsi. Yāsūsitē, sīkūsitē notsi yōkū ōmōnbākārū. Ōmōnbākātē, sīkūsitē notsi yōkū u.
§ 3. Mono hon-baisū āri; waza siu-si āri. Sen-kou sūrū tokōro wō sirebā, sūnavātsi mitsini tsūkāsī.
§ 4. Inishēno mēt-tōkū wo ten-ka ni akirākānisēto hōssūrū mono vā mādzū sono kuni wo osāmū. Sono kuni wō osāmēto hōssūrū mono vā mādzū sono ihé wō totongu. Sono ihé wō totonōgūto hōssūrū mono vā mādzū sono mi wō osāmū. Sono

治身科 3 92

一土曜日、今日他出なし、終日在宿して諸事期定を成す。夜前モンブラン来て読す。
一日曜日、西曆十二月十七日、外出なし、夜前よりモンブラン及履所取役夫人、日本原所出品支配頭老人来去して、一別の食事と共にす。子正前十時にして皆帰る。
一月曜日、今日氷屋開所を見る。夜二入て歌置田中地理学の集金に行、数拾人一同食事を成す。
火曜日、今夕出の客にて費用也。夜二入てモンブラン来去、食事と共に一別を宿。七時四拾五分巴里斯を發車す。子正後二時半英仏の海艇を渡り朝八時離動所ノッゲンシントンンの客舎ニ宿す。

旅費内書シウセーフ 丑十月廿九日の書出を以相私。白河運次師監學科の内として、十月廿九日相渡ス。
石屋御私不居の由二付、御指傳、西曆十二月十九日、我十一月二日。
巴里斯宿館私協定として、丑十一月十日相私、巴里斯出立二付、モンブラン来去、茶地定いたし松松丑十月二日。

(17) p. 50

(L21X) 洋学伝習と日本事情

1999. 7月31日付  
蓮沼啓介

1. 洋学伝習生の和蘭語学習法
2. 日本事情の1. 日心配のフマニタツ協力
3. 日本事情の2. エブラー伯への字子
4. 日本事情の現段階についてコメント

(資料1)

WelEdelHooggeleerde Heer !

Ik heb de eer UE brief te ontvangen, waardoor wij de eer zullen hebben vrijdag 9 ure bij UE onze werkzaamheden te hervatten, en nu hierbij zend ik het laatste deel van olkenregt. met beleefdheid en hoogachting

UEdle dienstwillige dienaar  
Nisi Sioesoeke.

donderdag 3 december 1864.

大正判洋学伝習と日本事情 著者 和蘭留学団員 蓮沼啓介 1992

蓮沼啓介  
ライオンに於ける西國の海軍の通  
南洋大学大学院紀要  
1922  
P.228

西 周助  
一八六四年十二月三日  
拝啓、お手紙拝受致しました。お手紙により、われわれは有難いことに金曜日九時先生の許において再び職業を再開することができました。ここに本書に添えて萬國公法の最後の部分をお送り致します。敬具。

洋曆	和曆	日記	出入書	日数差
12. 4 (月)	10. 25	一月曜日。午後モンブラン来て信件を脱す。		
12. 5 (月)	10. 26	夜二入てエレキナイセ・ランフ製所所に行	エレキナイセ・ランフ製所迄往來馬賃と	
12. 6 (月)	10. 27	て見る。今晚和蘭へ来りし幕生商人当合へ	して相払。十月十六日。	+1
12. 7 (月)	10. 28	来る。		
12. 8 (月)	10. 29	一月曜日。早天。幕生西。津田商人面会。陸		
12. 9 (月)	10. 30	件を脱して他出なし。夜二入てモンブラン		
12. 10 (月)	10. 31	来会す。		
12. 11 (月)	11. 1	一月曜日。早天より幕生商人来り陸結。午後		
12. 12 (月)	11. 2	王城を圍て見物す。		
12. 13 (月)	11. 3	一月曜日。午前より焼物製所を見る。夫よ		
12. 14 (月)	11. 4	りウエルサイと云へる古仏僧の住居せし旧		
12. 15 (月)	11. 5	城なり。夜二入て備忘。		
12. 16 (月)	11. 6	一月曜日。午前街中へ出て陸物を弁す。午後		
12. 17 (月)	11. 7	は、水機製所へ行て見る。夜二入てモ		
12. 18 (月)	11. 8	ンブラン其他馳走也。礼儀として料理屋へ		
12. 19 (月)	11. 9	行く。		
12. 20 (月)	11. 10	一月曜日。街中を散歩し、ボアア・ボルニニ		
12. 21 (月)	11. 11	行て見物す。夜一時ホアベラの奇なるを		
12. 22 (月)	11. 12	に行。モンブラン案内す。		
12. 23 (月)	11. 13	一月曜日。休日にて他出なし。幕生商人は日		
12. 24 (月)	11. 14	来て陸物を脱すのみ。		
12. 25 (月)	11. 15	一月曜日。幕生商人と共に、街中陸物を見物		
12. 26 (月)	11. 16	す。夜二入てモンブラン来て陸物を脱		
12. 27 (月)	11. 17	す。		
12. 28 (月)	11. 18	一月曜日。モンブラン来て陸物を脱す。亦幕		
12. 29 (月)	11. 19	生商人来会。陸結し街中を散歩す。		
12. 30 (月)	11. 20	一月曜日。午後よりモンブランの住居に往て		
12. 31 (月)	11. 21	陸物を脱す。夜二入て街中を散歩す。		
12. 32 (月)	11. 22	一月曜日。早天より仏國政府の標馬製所へ		
12. 33 (月)	11. 23	行て見物し、午後陸物製所を見る。夜		
12. 34 (月)	11. 24	二入て街中を散歩す。		
12. 35 (月)	11. 25	一月曜日。幕生来て今夕決定の密にて陸物を		
12. 36 (月)	11. 26	脱す。モンブラン来て亦陸物を脱す。夜二		
12. 37 (月)	11. 27	入て幕生商人出立を送る。		
12. 38 (月)	11. 28			
12. 39 (月)	11. 29			
12. 40 (月)	11. 30			
12. 41 (月)	11. 31			
12. 42 (月)	11. 32			
12. 43 (月)	11. 33			
12. 44 (月)	11. 34			
12. 45 (月)	11. 35			
12. 46 (月)	11. 36			
12. 47 (月)	11. 37			
12. 48 (月)	11. 38			
12. 49 (月)	11. 39			
12. 50 (月)	11. 40			
12. 51 (月)	11. 41			
12. 52 (月)	11. 42			
12. 53 (月)	11. 43			
12. 54 (月)	11. 44			
12. 55 (月)	11. 45			
12. 56 (月)	11. 46			
12. 57 (月)	11. 47			
12. 58 (月)	11. 48			
12. 59 (月)	11. 49			
12. 60 (月)	11. 50			
12. 61 (月)	11. 51			
12. 62 (月)	11. 52			
12. 63 (月)	11. 53			
12. 64 (月)	11. 54			
12. 65 (月)	11. 55			
12. 66 (月)	11. 56			
12. 67 (月)	11. 57			
12. 68 (月)	11. 58			
12. 69 (月)	11. 59			
12. 70 (月)	11. 60			
12. 71 (月)	11. 61			
12. 72 (月)	11. 62			
12. 73 (月)	11. 63			
12. 74 (月)	11. 64			
12. 75 (月)	11. 65			
12. 76 (月)	11. 66			
12. 77 (月)	11. 67			
12. 78 (月)	11. 68			
12. 79 (月)	11. 69			
12. 80 (月)	11. 70			
12. 81 (月)	11. 71			
12. 82 (月)	11. 72			
12. 83 (月)	11. 73			
12. 84 (月)	11. 74			
12. 85 (月)	11. 75			
12. 86 (月)	11. 76			
12. 87 (月)	11. 77			
12. 88 (月)	11. 78			
12. 89 (月)	11. 79			
12. 90 (月)	11. 80			
12. 91 (月)	11. 81			
12. 92 (月)	11. 82			
12. 93 (月)	11. 83			
12. 94 (月)	11. 84			
12. 95 (月)	11. 85			
12. 96 (月)	11. 86			
12. 97 (月)	11. 87			
12. 98 (月)	11. 88			
12. 99 (月)	11. 89			
12. 100 (月)	11. 90			

(蓮沼「ハ・リ・マ・シ」神学雑誌 32巻2号、1992、pp.346~380)